

あいち平和映画祭2011プレ企画 『沖縄』上映会

沖縄

劇映画

あの感動のたたかい いまこそ語り伝えたい



一部 一坪たりともわたすまい
二部 怒りの島

製作担当：山本薩夫・伊藤武郎 脚本・監督：武田敦
出演：地井武男 佐々木愛 岩崎信忠 富山真沙子 加藤嘉
鈴木瑞穂 花沢徳衛 佐々木すみ江 飯田蝶子
戸浦六宏 トニー和田ほか

4月2日(土)

伏見ライフプラザ
12階 第1研修室

地下鉄「伏見」駅6番出口南へ400m(中消防署ビル)

1部2部
連続上映

第1回上映 13:00 ~ 16:30

第2回上映 17:00 ~ 20:30

いずれの回も1部と2部の間に10分間の休憩あり

入場料金

前売・予約：800円 当日：1000円

大学生以下：500円

前売・予約は下記の実行委員会まで

主催：あいち平和映画祭2011実行委員会(代表 稲垣美智子)
後援：名古屋市

あいち平和映画祭2011

5月28日(土)

ウィルあいちホール

上映作品

ANPO

インビクタス / 負けざる者たち

カティンの森

連絡先 TEL:052-938-5402 Mail: a9s-n-kato@nifty.com

HP: <http://aichiheiwa.movie.coocan.jp/>

劇映画

沖繩

阪井芳貴

名古屋市立大学教授・美ら島沖繩大使

多くの人に観ていただきたい

70年に公開された映画「沖繩」が、このたび名古屋で上映されるという。第一部・「一坪たりともわたくすまい」、第二部・「怒りの島」の二部構成、上映時間3時間超の大作の上映は志のある方達の熱意がなければ、成り立たない。それが昨年、京都や沖繩をはじめ全国で上映会が催され、静かなうねりとなり、名古屋にも届いたということになる。

なぜ、40年も前の、モノクロの、非常にハードな内容の映画が、復活したのか？それは、民主党政権発足により、にわかに関を揺るがす政治課題・社会問題となった普天飛行場移設問題が、やがて混沌混沌を経て絶望と不信のみを残す形で終熄していった、その脱力を再び活力に切り替えるきっかけにしたい、という思いが募ったからである。

例えば、1995年の県民大会の前後にも、全国でこの「沖繩」上映会が開かれた。つまり、沖繩県民全体を揺るがす動きがあるたびに、連動して上映されてきたと言えるのだが、それは「70年当時と『今』とが変わっていないこと」を認める場としての役割を担ってきた、ということの意味する。

しかし、確認はもうこれきりにしなければ、と思う。この映画で描かれる農民の土地闘争・全重労のストが、「復帰」というひとつの成果（それはそれで問われなければならぬ）をもたらし、その歴史を学び、現在の閉塞状況を破壊する力をここから得なければ、意味がない。また、昨年来、「沖繩差別」ということが沖繩では頻りに語られているが、「差別している」ヤマトウンチユにはその自覚がない。両者の間にある深い溝を埋める作業も、この映画を観ることから始める人にとっても、多くの人に観ていただきたい。

沖繩では昨年10月から各地で再上映されています

沖繩県上映会チラシの「かいせつ」から

この作品は、今から41年前の1969年に、全国で製作運動・上映運動が展開され、大きな感動を巻き起こし、本土での復帰運動を大きく高揚させる役割を果たした画期的な映画です。

第一部では、土地を奪われた島民たちの怒りと闘いを描いています。

第二部では、教育労働者基地労働者たちの共通の「民族の自覚に燃えた怒り」を主題に、全編を通じて沖繩の即時無条件全面返還のたたかいを描いています。

「日米合意」後本土マスコミの多くは、日米同盟重視の視点から辺野古への新基地建設を容認する論調を繰り広げています。このような動きに抗して、いま、本土各地で劇映画「沖繩」の再上映運動を通じて、沖繩への関心を喚起し、県民の闘いに連帯する動きが始まっています。

「復帰運動のような、あの島ぐるみの運動をもう一度」の思いを込めて再上映を行います。

劇映画「沖繩」再上映を支援する会 呼びかけ人 新崎盛暉 安仁屋政昭ほか

あいち平和映画祭2011 実行委員のひとこと

注意深く聞けば、米軍に寄り添った人々は単に受け入れたのではなく、理不尽を能動的に引き受けて生きるという覚悟を持っていることが窺える。その尊厳に目を背け、負わずままでのいか。

「昔はね」ではなく「今もね」と教えてくれている「変わらないよ」と。

沖繩だけの問題ではなく、この国の昔と今、そして未来の在り方をも教えてくれた良い映画でした。

まず、ハッと昔を思い出した場面は、基地内に侵入して薬莢拾いをする貧しい島民たちと、ベトナムに向かって次々に発進される悪魔のような巨大で真っ黒の長い胴体と翼の爆撃機でした。北爆による非道な殺戮行為が本格化し、沖繩はその最大の発進基地の役目を担わされた痛々しい姿でした。

一方、当時の本土はこの沖繩の多大な犠牲の上に乗っかり、高度成長にまっしぐらの時でした。初めての海外出張



の帰路、戦火真っ只中のベトナム上空を飛び、窓から恐る恐るその光景を眺めたことを思い出しました。でも正直、60年安保時には学生デモに加わったのに、その後の沖繩の方々の過酷な苦しみには全く関心が至りませんでした。

映画は現在よりも悲惨な米軍占領下での島民の様子を描いた作品ですが、復帰後半世紀近く経ってもなお平穏な生活は許されない苦しみにあることを、ごく最近になって再確認させられ恥ずかしい限りです。

労働団体の古株（失礼）の方の話によるとこの映画、当時はバイクにフィルムと映写機を積んで上映会場を巡ったとのこと。そんな熱気的一端でも、今回の上映会に来ていただいた観客の皆様に伝わりますように...

ますます斜陽化する邦画界で、67年「若者たち」がヒット。久しく沈黙していた独立プロダクションが再び注目を集めた。そして安保と万博の年70年に、この「沖繩」で返還を訴えた